



「ネットワークの再結合と活性化を急げ」

小樽商科大学商学部経済学科教授・地域研究会副代表 江頭 進

このコラムのこれまでの論者のように、新しいビジネスプランの提案の一つでもできれば良かったのだが、小樽商科大学地域研究会の副代表としてこれまで私がやってきたことは主に「調査」である。そこでは問題点の抽出と分析が中心的な仕事となり、なかなか簡単には希望のある将来プランにつながりにくい。それを承知の上で、これまで調査してきたことにもとづいて話してみたい。

地域研究会は、北海道経済に対する各種の調査を行っているが、私が分析の中心にしているのが、「ネットワーク分析」である。これは、地域や産業のメンバーや要素の間の関係の結びつきの強さを調べるものである。進化経済学ではこのネットワーク分析を基礎として、地域の「健康状態」を調べる「地域ドック」が研究されつつある。

街におけるネットワークは、人間における神経網であり血管網である。そのネットワークの上をお金や情報が循環することで地域は生きていけると言ってもよい。循環がスムーズだと街は活性化し、逆に「動脈硬化」が起きたりすると街は衰退する。また、ネットワークが切れていると資金と情報は外にあふれ出たりするし、場合によってはネットワークの「ハブ」が欠けることもある。このネットワークのハブとは、その地域のキーパーソンだったり、重要な産業だったり、人々が集う場（店やグループ）だったりする。このネットワークがうまく機能しないと、小樽の「持ち味」を活かすことができない。

残念ながら、現在の小樽は、高齢化によるハブの欠落とネットワークの断裂、過去の成功体験と個別の現状への「満足」による動脈硬化のいずれもが起きている状態である。1980年代から産業の構造転換の中で、街の各地点の機能が変化した。その過程で市民生活の中心であった市場や商店街が不活発になっていった。パイパ

スや大規模商業施設の建設がその変化に拍車をかけた。古くから存在する商店街や市場は高齢者の労働拠点である。自営業には定年がなく、本人のやる気がある限りは働き続けることができる。皮肉なことに若者に労働環境を提供しようとした大規模商業施設の誘致や、流通の円滑化のためのバイパスが古くからあった商店街や市場の衰退を促し、ハブを失う一因となった。街の中心部から人がいなくなり、それまで日常生活の中でつながっていた人間関係が希薄になっていく。古くからのネットワークは、そこに次々と若者が入っていくことで更新されるが、それには成功していない。

それでも、小樽にはJCや観光協会や運河の保存運動に関わった人たちの間などにいまだ人のつながりが残っているとを感じる。ただ、それらのネットワークがうまく連携しているとはいえない。新たなマーケットが生まれる前には、ネットワークの結合と活性化が不可欠である。そのためには「ハブ」になる人物や拠点の発見、ハブを中心とした再接続のための事業が必要である。生き残っているネットワークをつないで活発化し、その中の情報や資金、商品の流れを阻害している要因を洗い出して排除することが、小樽が再生するために不可欠だろう。私は旧来の制度を全部撤廃というような改革には与しないが、古くなった「神経」の結合や血管の「梗塞」の除去には、小さくない痛みを伴う「手術」は必要であろう。

時間はそれほど残されているわけではない。現状では、基本となるネットワークの維持が人口減少と高齢化のためにできなくなる日も近いからだ。一度主要なネットワークが消滅したら、復活させることは難しい。その後に残るのは、社会コストが高く非常に住みにくい街だけである。